

# Asian Volunteer Report

Oct 2009

アジアンボランティア・レポート

2009年10月

ICアジアンボランティア・サポート基金

呼びかけ人代表 藤田 悟 (文化交流学科教員)



## たくさんの“初めて”に遭遇

現代英語学科 1年 木村 紫絵里

この夏は、私にとって全てが新鮮で、全てが初めての体験だった。何より海外自体が初めてだったため、わからないことだらけで、約一ヶ月間、何をすることも無我夢中だった。

私がこのプログラムに参加した理由は、ただ、“ずっと行ってみたいかった”からだ。以前から、発展途上国に興味を持ち、自分の目で確かめたいと思っていたが、思っているだけで、なかなか行動に移せていなかった。

入学して生活も落ち着いてきた頃、たまたま貼紙を見つけて、期限ギリギリで飛び入り参加。ここにきてやっと、行動に移せたのだ。

カンボジア。この言葉を聞いて、まず何をイメージするだろうか。地雷、虐殺、

貧困……。どうしても暗いイメージが先立ってしまう気がする。実際、私が「今年カンボジアへ行くんだ!」と伝え、皆「海外初でカンボジア?大丈夫なの?」と決まったように返ってきた。私はそれが悔しくて、意地を張ってでも行ってみようと思っていた。しかし、それは現実の話なのである。

平和が戻ったとはいえ、未だに地雷が埋まる地域は多く存在し、貧富の差は激しい。現地で目の当たりにした瞬間は衝撃で、思わず涙が出たこともあった。

しかし、感じたのは、カンボジアの人々は、明るく、エネルギッシュな人が多く、笑顔に溢れているということだ。どこへ行っても、キラキラした笑顔で「どこから来たの?」などと話しかけてくれ、ま

た、街の屋台で食べ物を買うか悩んでいた私に通りすがりのお兄さんが「食べてみな!」と奢ってくれたこともあった。

友好学園の生徒もまた明るく、本当によく笑う。そして、学習意欲でいっぱいだった。試行錯誤しながらの私たちの授業も、輝きに満ちた目で聞いてくれ、単語ひとつを教えると「せんせい!」と私を呼び、何と読むのかと尋ねてくる。ひとつでも多くを学ぼうとするその姿勢に心打たれ、今までの自分を見つめ直させられた。

友好学園での生活は、便利とは程遠いものであった。蛇口をひねれば水が出、スイッチひとつで電気が点き、食べたいものを食べたいだけ買える。そんな当たり前だった生活が、そこにはなかった。初めて井戸を使い、初めて水浴び(お風呂?)をし、初めて足踏みで洗濯をする。しかし不思議と、電気も水道もない生活だったが、全く苦痛ではなかった。

たくさんの“初めて”に遭遇し、全てがわくわくし、楽しかった。そう感じられたのはきっと、先輩方や通訳さん、仲間の支えがあったからだと思う。

「人は一人では生きていけない」。ありきたりな言葉だが、本当の意味で、初めて理解できたような気がする。

この夏体験した全てのことは、私にとって宝物で、本当に行けてよかったと思っている。

そして、もし、少しでも興味を持っている方がいたら、ぜひ現地に行って欲しい。そこには、言葉では伝えきれない沢山の感動が待っている。



# 毛の生えた大きなクモが

人間福祉学科 1年 齋藤 美穂

人と話すこと自体あまり得意ではない自分にとって、教壇に立ち授業をするということは本当に手探りのようなものだった。必死に考えた教え方は頭から全部飛んでいく、言ったことに反応が返ってこなかったり、通訳さんを通さず伝えたいことがあっても、伝えることができない言葉の壁。次々自分の中に入り込んでくる初めての状況にどうすれば良いのか分らず、泣きそうになったことが何度もあった。

しかし、その状態から抜け出すきっかけは本当にささいなことだった。なんとなくつまらなそうな顔で授業をうける女の子に、恐る恐る「むずかしい？」と聴くと、すごく満面の笑みで「はい」と返事が返ってきた。そして彼女はノートに写した日本語を私に見せ、クメール語、英語、覚えたての日本語、身振り手振り、たくさんのことを駆使し、私に「これはなんて読むの？」「どう書くの？」と聴いてきた。私も彼女と同じように切れ切れ覚えている単語や、生徒の教科書を借りて日本語をクメール語で書いてみると、彼女はどうやら分ってくれたようでノートを見ながら頷いた。「わかった？」と聴くと、「わかった！」とやっぱり笑顔が返ってくる。すると、それをきっかけに彼女の後ろに座っていた男の子が身を乗り出し、「これは？」とノートを指さす。そんな風に次々と質問が飛び交った。その日の授業はあっという間に時間が過ぎた気がした。

生徒の笑顔から気づいたことは多かった。教えるということに気を取られ、自分のことでいっぱいだったこと。なにより生徒の目を見て日本語を教えるということが自分にはなかった。それからは小さな工夫で授業は変わった。友好学園の生徒は基本「学ぶ」ということに積極的だ。覚えたての日本語を喋ろうと力強く手を上げる子、恥ずかしそうに手を上げる子。大げさではなく、キラキラしたみんなの目は忘れられない。

何かを学べるのが当たり前という感覚だった自分にとってその目は衝撃的だったのと同時に、自分が少し恥ずかしくなった。私がカンボジアの子ども達に日本語を教えるより、子どもたちから教わった言いようのない感覚の方がずっと大きいものだったのではないかと思う。

初めてのカンボジアは楽しいことも、驚くことも多かった。休み時間のたびに小さな花でできたブレスレットをくれたり、日本語で書かれた私のノートを不思議そうに覗き込んできたり、授業が終わった午後は遊びにきた生徒と遊んだり、今度はこっちがクメール語を教えてもらったり。

夜中にトイレに入れば、日本ではとて



も会うことのないような毛の生えた大きなクモがいたり、シャワーは無いから夕方うちの井戸水を浴槽に溜め、手桶で体を洗ったり。日の出を見ようと扉に登った最終日、残念ながら日の出は見られなかったけれど、視界一面に広がる水田に映る群青色の空と薄い朝日に染まった雲は、見たことのない美しさだった。

プノンペンにある王宮の近くではペットボトルを持ちながら歩いていると、服を着ていない物乞いの子ども達に囲まれた。お金をちょうだいと言うのではなく、その子ども達が欲しかったのはペットボトル一本の飲み物だった。ペットボトル一本ならあげてもよかったのかもしれない。しかし、子ども達のあまりの

必死さに呆然としているうちに、子ども達が急に走ってどこかへ行ってしまった。

最初は何故か分らなかったが、あとで聞いてみると、警備員の大人がやって来て他の物乞いの子どものお腹を蹴り上げたことが原因だったらしい。すぐ自分のそばで起きた日本では起こり得ないだろう出来事に驚き、涙が出た。

約1カ月近くをカンボジアで過ごす、物質的にもすごく豊かなわけではないということを感じる。しかし、生活している人を見ると、決して不幸というわけではない、そんな笑顔が多かった。村を歩いていると、知らない村人に「いっしょにサッカーしないか？」的な感じで手招きされたこともあった。そんな親しみやすさと、物乞いの子ども達とのギャップは大きいものだったけれど、そのギャップも全部自分の身の回りで起き

たことなのだと思うと、今まで自分の世界がどれだけ狭かったのかを実感した。

もともと私がこのプログラムに参加したのは偶然だった。プログラムの存在自体は知っていたけれど、とくに行こうとは思わなかった。しかし、さきに参加を決めていた友人の話や、今まで参加してきた先輩方の話を聞き、なんとなく『カンボジアに行かなければ』と思った。プログラムの締め切りギリギリに先生を訪ね、詳しい話もよく聞かず、参加を決めた。

授業案作りや移動手段の確認、荷造りなど、あまりの大変さに逃げようかな……と何度も思った。しかし、日本に戻って来た今となって思えばやはりカンボジ

アに行って良かったと思うのだ。具体的にこれを得たなんて言葉になるものはない。ただ、ふとした瞬間に子ども達の笑顔や通訳さん、砂埃がまっている町並み、カンボジアの景色が浮かぶ。自分がカン

ボジアの人たちにできることは何か。それができる自分に少しでも近づいて、いつかもう一度カンボジアという国に行こうと思う。



杯は当然のようにおかわりしてました。おかずは汁物と炒め物が一品ずつで汁物は具は変わるもののベースの味はいつも一緒だった気がします。気のせいかもしれませんが。

お風呂は大きなたらいに井戸で水を汲んでクロマーという布を腰に巻いて、外でそのたらいにためた水を浴びる感じでした。

今考えてみると自分にとってはボランティアというよりは社会科見学だった気がします。日本じゃできない、カンボジ



アじゃなきゃできない体験をいっぱいしました。

いろんな話を聞いて、いろんなものを見て、日本が作ったっていう道路や橋も見だし実際通ったし、そういう意味では目標達成できたかなって思います。こういう貴重な体験をさせて頂いて先生にはホント感謝です。そして一緒に生活したメンバーの方々にも。

来年はもっと発展して暮らしやすくなってると思います。機械に頼りきっていない人間味のある生活ができるカンボジアが自分は好きです。だからもしかしたら来年は水道ができて井戸が無くなるかもとか考えると少し寂しい気がします。

普通が普通じゃない生活をして自分がどれだけいい環境に生まれたか改めて思い知りました。こういう恵まれた環境だからこそこの気持ちを大事にしていきたいです。

## ボランティアというよりは

食物健康科学科 1年 西野 治樹

自分がカンボジアに行った理由は三つありました。まず一つは単純にカンボジアという国に行ってみたい、というものです。家族で海外旅行に行ったことはあるけど、観光地でもないカンボジアに行けるなんていい機会だと思いました。二つ目は、募金がちゃんと使われているかということを知りたかったからです。日本では街中やコンビニなどいたるところにユニセフや何ちゃらの募金箱がありますがそれで集めたお金は実際別のところにまわっているという話もききます。だから、一度実際にカンボジアに行って自分の目で確かめようと思いました。三つ目はカンボジアの本当の姿を見てみたいと思ったからです。テレビをつけるとたまにカンボジアの特集をやっていますが、その二時間たらずの時間では伝えきれないものっていっぱいあると思うし、やはりそういうのも自分の目で確かめたかったです。

友好学園は首都プノンペンから車で二時間ぐらいのリング村という小さな村にありました。リング村に行く途中、車が止まると物売りの人たちが集まってき

てその中には十歳にも満たないような子も。その時ようやくカンボジアに来たんだなぁという実感がわきました。

友好学園での生活の一日は午前中授業をして午後はそれぞれ自由時間というものでした。放課後学校に遊びに来る子供たちとバスケやサッカーをして遊んだり、市場へ買出しに行ったり、洗濯物をしたり。サイという蹴鞠みたいな遊びなどカンボジアの遊びも教わりました。むこうのアリは日本のアリより小さいくせに噛まれるともすごく痛く、水ぶくれみたいになります。突然のスクールの中、服を脱ぎ捨ててシャンプーもしました。市場はお祭りの模擬店の集まりみたいな感じで昔よく行った駄菓子屋を思い出しました。

むこうは街灯がないせいか暗くなるのが早く六時にはもう真っ暗でした。明かりといえばバッテリーにつないだライトとロウソクと懐中電灯くらいです。はじめはカンボジアのご飯を食べれるか不安でしたが、友好学園の管理人さんの作る料理はおいしかったです。タイ米はすかさずかしてて全然おなかにたまらず二~三



# あっ、これがカンボジアかあ !!

現代英語学科 3年 田山 由佳里

私がこのボランティアに興味を持ったきっかけは、先輩たちでした。先輩たちの話を聞いたり、写真を見せてもらっているうちに、好奇心おおせいな私は行動に移さずには居られなかった。親や友達に「えっ!? カンボジア?」ってみんな同じ反応。それでも行きたかった。でっかい期待と不安を抱きつつも……。

タイを経由してカンボジアに入国した。バンコクの空港を一步出た瞬間、日本とは違う空気、雰囲気を感じた。見たこともないカラフルなタクシー、明るいネオン、馴染みのあさいタイ語に圧倒され、日本を出たんだとやっと実感できた。カオサンに何日か滞在し、買い物やマッサージなど、タイ人のよくわからないノリと共に楽しんだ。

→「お姉さん綺麗だね。愛してる～」  
物価の安さにも驚いた!

いよいよ待ちに待ったカンボジアへ向けて出発。しんどかった……半日かけての移動。とにかく長旅でしんどかった。トイレを我慢するのはもう懲り懲りだ。歩いて国境を越えた。すごく不安だった。タイとは一変した雰囲気。質素でほこりっぽい。活気がない。物乞いをしてくる子供を目にし、どうしていいかわからない呆然としている自分がいた。しかし、車で走っていると、だんだんと綺麗な建物やホテル、お店が見えてきた。デパートもあった。一気にカンボジアへの偏見が無くなった。ちゃんと栄えていた。本当に驚いて一気にテンションが上がった。スゴイ! ホテルに着いた瞬間ほっとして、すぐ寝てしまった。(笑)

カンボジアでは、先輩たちの知り合いのガイドさんにすっごくお世話になった。カンボジアの鍋料理やおいしい食べ物屋、アンコールワットや穴場スポット、と忙しいにも関わらず私たちを楽しませてくれた。長い滞在期間だったので、従業員さんとも仲良くなって、ついつい帰る度に「ただいま」と言ってしまうようになった。その分別れは寂しかった。本当

に“親切”な人たちで、“感謝”の一言。そして本来の目的の地に向けてまた旅立ちだ。

また村までの道のりも長かったし暑かった。時間が経つにつれ道も悪くガタガタゆられ、軽いアトラクション並みだった。しっかりとした建物も見えなくなり、また不安が襲ってきた……。

学校に到着するとすぐに先輩がその生徒と感動の再会。つい見とれてしまい、なんかいいなあと微笑んでいた。

休む間もなく明日から始まる授業の準備とここでの生活スタイルに慣れるのにもう精一杯。わかっていたとはいえ、電気も水道もない生活は想像以上に大変だった。

井戸をこぐのも初めて。水が出てきた瞬間すごく感激した! バケツにくんでお風呂に運ぶ。普段はボタン一つでお風呂が沸くのに。蛇口をひねればいくらだって水はでてくるのに。もちろん髪の毛も自然乾燥。

私たちは贅沢をしてたんだなあと改めて実感した。何度日本を恋しく思ったことか……。

しかし、こっちの星空には言葉にできないくらい魅了された!

まるでプラネタリウムにいるみたいだった。おまけにたくさんの流れ星も。日本ではみられない、カンボジアだからこそのものだと思う。これこそ贅沢だ。

生徒たちとの初の顔合わせの日。集まってくれた人数の多さにびっくりした。子供たちはとても人懐っこくて愛らしい。私のぎこちない授業も向上心にあふれた素直な彼らが助けてくれた。きが

つけば、たくさんの生徒が笑顔で名前を呼んでくれていた。何だかわからないけど照れくさい。嬉しくて嬉しくて、駆け寄らずにはいられなかった。

生徒たちが何か美味しそうなのを食べているから「おいしい?」ってきくと笑顔で何も言わずそれを分けてくれる。食いしん坊って思われてたかな。学校が終わってからもスポーツしたり歌ったり、ふざけ合ったりして短い時間を一緒にすごして遊んだ。自分も子供みたいにはしゃいでいたと思う。言葉が通じなくても、お互いに何か感じられるものがあつたから苦痛はなかった。Harrisが口癖のように言っている“high quality students!!”まさにその通りだった。

「今から何する?」って言ってたくらい時間に追われることのないゆったりとした日々。とても充実していた。その中でいろんなことを経験して学んだ。やっぱり人は一人じゃ生きていけない。出会うことってなんて素晴らしいんだろう。

別れの日には辛かった。もっと一緒にすごしたかったし、むしろ住んでもいいと思った。最後の掃除の時は朝から生徒たちが無言で手伝ってくれて、一生懸命で掃いてくれた。小さい体なのに私たちの大きな重い荷物もすすんで運んでくれていた。最後の最後まで側にいてくれた。日本の男性よりも優しくて惚れるよ。



(笑) また来年、成長した彼らに会いに行こう!!!

ありがとう。お世話になった多くの人に感謝したい。

# 忘れられない夏

現代英語学科 3年 時崎 彩香

日本に帰ってきて数週間が経ち、レポートの締め切りが近づいてきたのに気付いて焦った私は急いでパソコンに向かった。しかし、急いで仕上げなければという私の気持ちとは裏腹に今年の夏を思い返すと次々に思い出が溢れ出してきた。

私が今回このプログラムに参加した動機は、一緒に参加したみんなにも言えないほど不純なものであった。同じ学科の友人のほとんどは今年の夏、それぞれの夢に向かって海外へ旅立った。そんな中で「一人寂しく日本で過ごすのは絶対に嫌だ!」という、いわば現実逃避のように参加を決意したのだった。

8月17日、私の長い1ヶ月が始まった。私は果たしてちゃんとやっていけるのだろうか。現地での生活、学校での授業、みんなとの共同生活……不安なことを挙げればきりがなかった。私は大きな不安とバックバックひとつで真夏の日本を飛び出した。降り立った場所は、まだ見ぬ土地、カンボジア。

私はカンボジア日本友好学園で2週間過ごした。そこで過ごした2週間は見るもの、感じるもの全てが新鮮だった。学校での一日は太陽が昇る前から始まる。午前中は4時間みっちり授業をし、午後は市場まで買い物に行ったり、子供たちと遊んだり、昼寝をしたり、おもいおもいの時間を過ごした。時計の針を気にせず、太陽の動きと共に生活をする。今考えると、何にもとらわれずにあんなに自由に過ごすことは、この先の人生でもうないかもしれない。

私がこのプログラムに参加するにあたって最も心配していた授業は想像していた通り、苦労の連続だった。時には授業がうまくいかず自信をなくし、授業をしたくないなあ、と思う時もあった。

しかしある日、授業が終わった後、授業中に分からないことがあったので教えてほしいと質問しにきた子がいた。私は、それだけ真剣に授業に取り組んでくれて

いるのだと、なんだか嬉しくなった。また、授業中に必死に黒板をノートに写す姿や、私たちの質問に一齐に手を挙げる姿を見ると、明日もがんばろうと自然に思えた。

そしてこのプログラムの最大の魅力は、現地の大学生との交流である。現地の大学生は、2週間一緒に生活し、授業には通訳として参加してくれた。



カンボジアの大学生は、何に対しても一生懸命取り組み、決して楽をしようとはしない。何か仕事があると、まず先に自分が動く。カンボジアの人々は労を惜しまないのだ。

彼らと一緒に生活する中で、いろいろな話をした。お互いの国のこと、文化の

こと、将来のこと……。自分の夢を語る彼らの目は輝いていた。そんな彼らを見て、私は自分の諦めきれないでいた夢に挑戦する勇気もらった。諦めなければ必ず道は開ける、そう思わせてくれた。

私は今回このプログラムに参加して本当に良かったと思う。なぜなら、「今」しかできないことを体験できたからだ。

カンボジアで過ごした日々を思い出すと、なんだか心が温かい気持ちでいっぱいになる。どこまでも続く青い空、降るような星空、子供たちの笑顔……。

そこで見たもの、感じたものすべてが

私を大きく成長させてくれた。今年の夏は、忘れられない夏になりそうだ。

最後にこのプログラムの実現にあたって協力してくださった引率の先生方、茨キリの先生方、現地の大学生など関わったすべての人に感謝したい。本当にありがとうございました。

# 次に行くならこれを持っていこう

現代英語学科 3年 小野 智恵美

私は今年3年生になって初めてカンボジアに行くことを決意しました。最初のころは今更参加するのはどうかな、と気の引ける思いでした。1、2年のころはアジアボランティアのことを知りながら自分は関係ないと思ってやり過ごしていましたが、これまでの自分を振り返ったときに、自分の大学生活の中でなにかこれだ!というものを残したいと思い、参加しました。これまで長く日本を離れたことがなかった私がいきなり1ヶ月近く海外で生活するという事は想像を絶するものでした。

日本からだとカンボジアへ直行便がな

いので、私たちはベトナムからバスでカンボジアに入国しました。陸がつながっているのに国が違うことに違和感を覚え、バスから見えるカンボジアの景色に期待が膨らみました。そこには見渡す限りの空の青と田園の緑、ときどき牛たちの行進。当たり前ですが、カンボジアの田舎と日本の田舎とはやはり空気が違って、移動中は窓の外に釘付けでした。

間もなく友好学園での生活が始まりました。最初は授業面、生活面とも不安だらけで、最後までやりとげられるかどうかもわからない状態でした。生活面は先



輩方や現地の通訳さんにアドバイスをもらったり、手伝ってもらったりして順調に過していましたが、授業の方はグループ内で考えなくてはならなかったので四苦八苦しました。そのため、午後の空き時間や夜のミーティングの時間を利用して授業計画を練り直し、どうしたら楽しい授業が展開できるか、それぞれの項目の時間配分はどれくらいがいいのかなどを考え直しました。その結果、初めはぐだぐだだった授業が少しずつまとまっていき、慌てずに教えることができました。

授業内で印象に残っていることはみんなが積極的に手を挙げて発表する姿。自信のある子は指される前から大きな声で答えを言ってくれました。自信がない子でも、何も答えないという子はいませんでした。間違っているでも自分の答えをきちんと発表し、黒板の前であきらめずに何度も直す積極性がとても印象的でした。また、ノートをとっているときに教室を巡回すると、こちらを見てにっこりしてくれたり読み方を質問してくれたりとついつい巡回の時間が長くなってしまいう時もありました。

毎日の授業はすべて午前中で終わるので、午後は基本的に自由時間でした。洗濯物を片付けたり、生活に必要なものの買出しに行ったりするのももちろんですが、毎日生徒たちが遊びに来てくれたので退屈することはありませんでした。男の子たちはバスケットボールやサッカーやバレー、サイというバドミントンのようなスポーツなど体を動かすことが好きで、女の子たちは髪を結ったり絵を描いたりするのが好きで、その点は日本と変わらないと思いました。また通訳さんたちとおしゃべりをしたり、一緒にかき氷を食べに

行ったりして交流を深めることができました。

こうして振り返るとあっという間の2週間でした。不便だと思うこともたくさんありましたが、次に行くならこれ

をもっていこうと思ったりしていて、いつの間にかまた行く気である自分がいま。大学を卒業しても、年をとってもこの貴重な体験は絶対忘れません。いつかまたみんなに会いに行きたいです。

## カンボジアの『当たり前』に苦戦

現代英語学科 3年 秋山 菜々子

カンボジアに行くまでの私は、カンボジアどころかアジアにすら関心がありませんでした。それまでの私の中のカンボジアは、サバンナのような大自然と店一軒軒すらないような壮大な大地であり知識はゼロでした。でも、今となってはとても恥ずかしいことだと思っています。そして、あんなに「行きたくない！」と騒いでいたのが嘘のようだと実感しています。100%行って良かったと思っているし、また行きたいと強く思っているほどはまってしまったようです。

そんなカンボジアにはまってしまった私ですが、日本とは違うカンボジアの『当たり前』にとっても苦戦しました。ホテルのシャワーは温水がでないし、虫は食

べるし、蟻に噛まれるし、お金強請られるし、レストランで頼んだものはこないし、学校では電気が通ってないし、牛肉は固くて絶対に骨つきで、炒め物にはパイナップルが入っているし、皆が見ているのに私だけが流れ星を見れないし…。一体何なのだろうと100%日本人の私や友達は信じられないことの多さに日々心が折れそうでした。しかし、人間「慣れ」でした。水のシャワーは当たり前で、蟻がない所なんて無く、むしろ午後は蟻退治の時間で、レストランは出てきたものを食べればよい…私の中でカンボジアの当たり前が自分のものになっていきました。さすがに、虫は絶対に食べませんでしたが、段々とカンボジアの生活が楽



しく、また日本に帰りたくなくなりました。カンボジアには日本に無い良いところがたくさんありました。それは、物価が安いとか、果物おいしいとか、そんなことだけでなく、自分を高める向上心だったり、じっくり考え直す時間であったり…きっと人それぞれ多くのものを得たと思います。

でも、カンボジアの生活が楽しくなったのは、「慣れ」なんかではなく、あの場にいたみんなのおかげです。いろいろな面倒をみてくれた先輩と、毎日を苦戦した友達と、助けてくれたカンボジアの人と元気をくれた子供たちです。実際、またカンボジアに行きたいというより、またみんなに会いたいです。みんなでカンボジアビールを飲んで、湿気たお菓子を食べて、真剣にUNOやって、流れ星みて、恋の話をして、この夏みんなでしたこと全部まだまだやり足りないです。私は、カンボジアでの生活が輝かしい宝物になったことを心から幸せに思っています。



## 輝く命を尋ねて—カンボジアの旅—

大学院教育学専攻（聴講生） 隈 強一

### ○旅への想い

私は長い間、インドやネパール、モンゴルの大平原へ行きたい、そこで現地の人と一緒に暮らしてみたいと思っていた。そこには何か大切なものがある、との想いが今回のカンボジア教育ボランティアの旅へと繋がった。もう一つ、動機があった。精神的に病んでいた一少女（A子）<sup>(注)</sup>の訴えが忘れられないのだ。彼女は精神科医に「私が求めているのは、医師と患者としてでなく（職業的關係）、人間と人間として接してほしい（生身の人間關係）。病氣の人間が本当に求めているのはそういう關係なのです」と訴えていた。心理カウンセラーを目指している私は、A子とはどのように向き会えるだろうかを考えていたのだ。今回のカンボジアの旅は、そんな私の期待と課題を持った旅であった。

### ○輝く瞳—生きている実感—

首都プノンペンからワゴン車で約4時間、メコン川を渡ったり、電気も水道もない片田舎のリング村、カンボジア・日本友好学園に着いた。一仕事終えて西の空を見ると、広々とした空は真っ赤な夕焼けだ。石畳に寝転んで満天の星を仰ぐと、流れ星が次々と降ってくる。

翌朝は5時起床、紫雲の合間から朝焼けの太陽が昇る。思わず合掌した。6時朝食、7時から授業。中学生の1年、2年生中心の夏休みスクーリングが始まった。あどけない生徒たちの顔、顔、顔。黒褐色の肌をした生徒たちが真っ直ぐに私たちを見ている。出席をとってネームカードを渡すと、少し恥らう表情を見せるのは愛らしい。底抜けに明るい笑顔、一心に学ぼうとする姿勢、私たちへの好奇心、と圧倒される。この子等の輝く瞳を見ていると、「あーそうだ、私はカンボジアに来たのだ。」と思った。

私はうかつにも、夜中の石畳でうたた寝をして風邪を引いてしまった。後半は回復したので、近郷の田園をよく歩いた。高床式の家の周辺には牛や豚、馬や水牛

もいる。鶏、アヒル、犬や猫も歩いている。どこまでも見渡せる水田風景は、ところどころに椰子の木立があって、はるか遠くに牛と人がわずかに移動していくのが分かる。稲の葉がときおりそよぐ以外は、ただ、ただ、静寂な世界だ。私はふと思った。農夫も子供達も、動物たちや私も、皆な自然の恵みの中で一生懸命生きている。生かされている実感、身体も活性化されてくるのを感じていた。

A子のことが心に浮かんだ。つい比較してしまう。カンボジアの生徒達には他者への甘えを感じない。優しさがある。純粋に「○○したい」の動機で動く。子供のときから自然や生活そのものに膚で触れている、命に直に触れる機会が多いのだと思う。村には共同体意識がまだまだ残っていた。A子にもここでの生活を味合わせてあげたい。カンボジアの生徒のような輝く瞳を取り戻してもらいたい。

経済大国日本では、生きている実感がほしいとリストカットをする子供達が後を絶たない。貧しいカンボジアと較べて日本は本当に豊かな国といえるのだろうか。

### ○訴える瞳—孤兒院の子供達—

学園での生活を終えるとプノンペンに戻り、近郷にある孤兒院を訪問した。院内に入ると、子供達が集まってくる。握手をするとその手をどンドン引っ張って行って自分たちの教室を見せたり、舞台のような所に連れていく。そこで、子供達とのダンスが始まった。私も夢中で踊った、楽しかった。しがみついて手を離さない子、「クマ、クマ」と何度も繰り返して名前を呼ぶ子たち。そのうちに、この子等の寂しさが伝わってきた。このおじさんは本当のお父さんではない、自分ばかりが独占はできない、あまり仲良くなっても後で寂しくなる、そんな気持ちが伝わってくるのだ。私はただ一時の通行人でしかないことが切なかった。

友好学園の生徒達からは沢山のエネル



ギーをもらった。しかし、寂しさに耐えているこの子達にはこちらのエネルギーを放出する必要があった。孤児院の子達は、みな愛を求めている。しかし、彼らも学園の子供達と同じように、自らの命を懸命に生きようとしていた。

#### ○絶望の眼—ポルポトの残したもの—

1975年から3年10ヶ月、政権を掌握したポルポトは「原始共産制」を目指すとして、実に200万とも言われるカンボジアの人々を粛清した。「反革命分子」の疑いをかけられた者は、逮捕・拷問のうえ処刑された。

そのトゥール・スレン収容所と数キロ離れたキリング・フィールドの処刑場を訪れて息を呑んだ。4階立てのコンクリートの建屋が並ぶその収容所では、電気ショック、水攻め、逆さ吊り、指の爪を剥がす、引きちぎる、階段のあちこちに今でも生々しい血痕がこびり付いていた。尋問を受けた多数の人々の顔写真が壁に並んでいる。物も言えず、ただ表情と眼光だけが訴えている顔写真の数々は心に焼きついて離れない。拷問は自白するまで続けられる。白状したとなると、深夜にトラックでキリング・フィールドに運ばれた。女性も子供も全員が殺されるのだ。50人から250人ほど入る大きな穴が並んでいる。一人一人が連れていかれ、穴の上からナタやこん棒で叩き落される、下で待ち受ける子供のような兵士が首を切る、最後は死体の上から猛毒をかけると、3度殺されるのだという。

思想は人を救うことも、平気で人を殺



すこともあるのだ。ポルポトの発想は、「新しい国を作ろう」「異物（異分子）は排除しろ」というものだ。

私はこれらの歴史の事実を単にカンボジアのこと、他人事とはどうしても思えない。自分の心の中にもある情景だ。「異物（不都合な部分）」を排除しようと責め、「自分や他者」を自分の思いどおりにコントロールしようとする精神構造は、程度の差こそあれ、私たちの心の中にも存在する。ポルポトの凶暴な思想もどこかでは私たちの精神構造と似た一面を持っていると思うのだ。

このことは、連合赤軍のリンチ殺人事件やヒットラーのホローコーストとも下手をすると繋がりがかねない危険性を孕んでいるのだと思う。

ところで、カウンセラーの仕事は、クライアントが自分や他者（不都合な異分子と思っても）と仲良くなり、困難な事態に対しても「自分がいかによく対処するか」、そのことにこそエネルギーが注げるようになることのお手伝いをする事だと思うのだ。

#### ○まとめ

改めて、人間の幸せとは何だろうと考える。私は、臨床心理を学ぼうちに、現代の日本人の心が精神的に病んでいる人の精神構造と似通ってきていると感じていた。そのことが、今回のカンボジアの旅を通して鮮明になったと思う。カンボジアの生徒たちの輝く瞳は、私たちに多くのことを教えてくれ、多くのヒントを与えてくれた。

また、ポルポトのあまりの残虐さを考えていたとき、オバマ大統領の演説記事（週刊金曜日7月号）を読んで感動した。彼は、ホローコースト否定や人種主義、排外主義など、最近の世界的な風潮を批判した後で、「我々は犠牲者に思いをいたすと同じように加害者も人間だったことを心に刻むべきである。我々自身の内なる残虐性に対して備えを整えるべきである。」と。

(注)「A子」は、成田善弘「心理療法的関係の二重性」に出てくる「境界例の一少女」のことである。



# コミュニケーションが取れる喜び

文化交流学科 4年 金子 竜也

8月20日、日本を離れた私達はタイ(バンコク)に降り立った。去年とはまったく感じ方が違っていた。見えてくる物すべてが懐かしく思えたのかもしれない。悪く言えば見慣れた風景に新鮮さを感じなかったのかもしれない。その日は新メンバー3人と私を含めリピーター2人の計5人が同じ空気を吸い込んだ。すぐさまバンコク無事到着に祝杯を交わした。新メンバー3人の笑顔を見ることができてホッとした瞬間でもあった。

8月21日、今年は去年とは違い空路でカンボジア(プノンペン)へ向かった。その日はフライトが遅れてしまいプノンペンのホテルに着いたのが午後8時を回っていた。大幅な遅刻であった。ホテルの外ではプログラムのメンバーと去年仲良くなったカンボジアの大学生が待っていてくれた。まるでその瞬間はドキュメンタリー映画の1シーンのような再会であった。1年ぶりに会えたことがとても嬉しかった。ただ残念ながらその日に再会した去年のメンバーと一緒にボランティアには参加できないとの報告もあった。信頼もしていたし去年からの延長もあったので残念な気持ちでいっぱいだ。「俺はみんなに逢いに来たのに…」そんな気持ちを尻目にカンボジア友好学園での日本語教育ボランティアのプログラムはやって来る。

8月22日、新しい通訳の大学生に会った。日本語の通訳として参加しているのに簡単な日本語しか通じなかった。自分

が英語やクメール語(カンボジアの公用語)をまったくと言っていいほど出来ないのにも非を感じてはいたが、これで授業が勤まるか心配な気持ちであった。でもその中にも1人だけ日本語を流暢に話す学生がいた。名前はメッカラーと言って去年も参加していたメンバーである。まだ大学1年生とは思えないくらい日本語と英語が長けている。私にとっても鏡のような存在であった。金の卵がお似合いで顔のほくろから毛が何本か生えている小さな力持ち。そんなメッカラーが今年の通訳のリーダーであった。そのため彼は、今年のプログラムが成功するかとても心配していた。

私のグループではサラットという大学生が通訳を受け持ってくれた。サラットとの授業のミーティングでは次の日の授業の内容を伝えるだけでも困難であった。なかなか通じない時にはメッカラーを通して伝えてもらうこともあった。そのような状態で1週間ぐらい共に生活しているとだんだんお互いを分かり合えるようになってきた。初めの頃はサラットにイライラしていた時もあったが、そんな気持ちも薄れていった。サラットは毎日のように日本語の勉強をしていた。その姿を見ていると申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった。すごく謝りたい気持ちでいっぱいであったが何も言えなかった。私は去年と何も変わっちゃいない。気付いてみれば今年の通訳の大学生ともまだ仲良くなっ

た。そんな気持ちに気付くと自然に授業でのやり取りがうまく行くようになった。

週末の飲み会ではあまり話したことのなかった英語の通訳の大学生とも触れ合うことが出来た。それは私の目標でもあったので素直に嬉しかった。誰が見ても格好悪い、おぼつかないコミュニケーションではあったが、コミュニケーションが取れる喜びがそこには存在した。今年は去年の経験から場数だけはこなすと決めていた。

尻上がりに新しい通訳との関係も良くなってきた。2週目に入るとここぞとばかりに遅れた登場で彼らがやってきた。来れないと言っていた去年の通訳の学生たちである。今は社会人として活躍している中でわざわざ休みをとって何人かが代わり番こで助っ人に来てくれた。嬉しいとありがたいが何層にもなって込み上げた。メッカラーも心から喜んでいて。私は最終日前夜こんな話をメッカラーとした。

-最終日の前夜-

メッカラー「竜也は今年どうでしたか？」  
竜也(自分)「メッカラーのお陰で良かったよ！」

竜也「メッカラーは？」

メッカラー「はい！とても良かった！」  
竜也「メッカラーは日本人好きですか？」

メッカラー「はい！とても好きです！」  
竜也「でも日本人はいい生活をしているのに嫌にならない？」

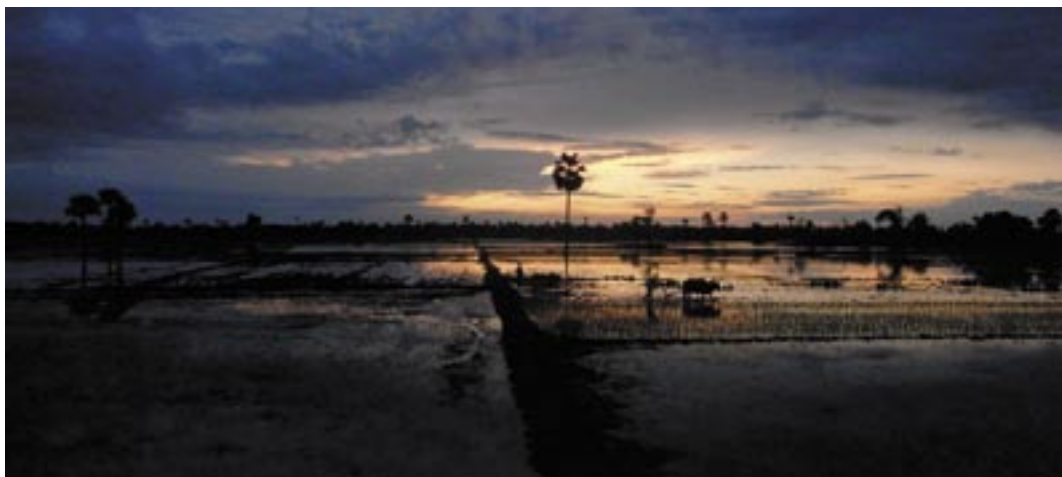
メッカラー「はい！全然そんなこと思いません。日本語の勉強が出来て嬉しいです！」

竜也「メッカラーはこのプログラムが終わったらどうするの？」

メッカラー「明日皆さんから給料をもらったら家族に渡しに行きます。早くお父さんとお母さんの喜ぶ顔が見たいです。」

竜也「全部渡すの？」

メッカラー「はい！貧しいで





すから…このプログラムは私にとって貴重な勉強の時間でもあるし親孝行できる時でもあります。」

竜也「じゃあプノンペンのバイトで稼ぐお金も家族に渡すの？」

メッカラー「いえ…毎日1時間だけですからちょっとしか貰えません。でも私はそこで英語を子ども達に教えています。自分の勉強にもなります。子ども達の将

来にも繋がります。私はお金が一番だと考えません。私はカンボジアがもっともっと発展してほしいですから。」

これは初めて真剣にメッカラーと話した一部分である。このような事を質問してレポートに載せてしまうのは御法度かもしれないがこれが真実である。この話を聞いたときはまるで私がアリより小さ

## どこでもスポーツを楽しむ気持は

文化交流学科 2年 大森 直浩

私は、8月下旬にカンボジアに行ってきました。違う文化での生活は、私にとってワクワクするものでした。その反面、初めてのカンボジアということで、現地の人々とコミュニケーションがとれるかとても不安でした。カンボジアに着いてみるとその不安はなくなり、現地の人々はとても温かく、言葉がわからなくても、全部ではありませんがお互いの気持ちを伝え合うことができました。

私達の旅の目的は、現地の子供達と触れ合い、学校で勉強を教えることです。学校(友好学園)は、リング村という小さな村にあり、私にとってここでの生活は、とても新鮮でした。午前中はいくつかのグループに分かれ、現地の人に通訳をしてもらいながら子供たちに日本語を教えました。私のグループは、自己紹介をしたり色の名前や折り紙を教えたりしました。皆熱心に取り組み、教えている

私はとてもうれしかったです。

午後は、子供たちとよくバスケットをして遊びました。カンボジアはバスケットが浸透してなく、ルールを知らない子供ばかりでしたが、皆仲良く楽しそうに身体を動かしている姿を見て、どこの国でもスポーツを楽しむ気持ちは変わらないと思いました。

友好学園での日常生活は?という、電気がなく、水を井戸で汲むなど私にとって考えられない生活でした。現地の人達はあたり前に生活していて、日本人がどれだけ便利な暮らしをしているか、そして先進国と発展途上国の違いを感じてきました。

カンボジアでは、まだ遠くない過去に大量虐殺が起きました。私はカンボジア人が拷問を受けたトゥール・スレンと処刑場となったキリング・フィールドに行きました。どちらも、拷問器具や写真

く感じた。私は愛国心なんてなにも考えたこともありません。胸を張って自慢できる親孝行もありません。この日本語教育ボランティアでは尊敬に値する人しかいないかもしれません。それこそカンボジアの大学生だけではなく、村の大人や子どもたちから教えられることもいっぱいある。一緒に生活を共にした日本人だってみんな尊敬できる一面ばかり。ユニーク、ユーモア、ユニバーサル、カンボジア!みんなありがとう!絶対また行くよ!



など、当時のまま残っていて生々しかったです。これは、わずか30年前にアジアで起きた現実です。

思い出したくもない出来事だと思います。ですが、この歴史を忘れることなく、もう二度と同じ過ちを繰り返してはいけなないと私は思いました。

私は、これからも日本だけではなくいろいろな国に関心を持ち、自分の視野を広げていきたいと思います。

# いつの目か、またね。

文化交流学科 4年 大竹 貴子

「また、来年もあえるよね？」  
 ちょうど一年前、友好学園を去る直前、子供達に問いかけられた。きつく結ばれた少し肌の色の違う二人の小指は、もう涙で見えなかった。しかし、その日から来年も必ずこの子達に会いにこよう、そう決心した。

そして、その一年後。私は大切な仲間と共に、再びこの地に足を踏み入れた。一年前と変わらないあの懐かしい景色を見て私の胸は高鳴った。友好学園に着くと、たくさんの生徒たちが出迎えてくれた。そこには去年と変わらない、キラキラした目の子供達の姿があった。見覚えのある顔もたくさんいる。少し背の伸びた子、顔が去年より引き締まり大人っぽくなった子、私の背を抜いた子、子供達の成長した姿を目の前にして本当に安心した。

今年の生徒達は去年とは少し雰囲気が変わり、どちらかというときシャイな子が多かった。そして、去年の子供達に比べ日本語が浸透していない、そんな印象を受けた。日本語を教える先生がいないことが原因のようだ。そのため授業も、日本語に興味をもってもらうことに焦点をあてた。一番のメインは“ありがとうの気持ちを伝えること”。不思議なことに、

大事な人にこそなかなかありがとうと言えなくなってしまう。しかし、ありがとうと伝えることは本当に大切なことだ。特にカンボジアでは、親しくなればなるほど、挨拶が減ると聞いた。だからこそ、いつでも“伝える”ことの大切さを子供たちにも覚えていて欲しかった。

そんなことを思いながら考えた拙い授業だが、必死にプリントに臨む子供達の姿を見ていると、私の方が考えさせられた。私が忘れてしまっている大事なことをふと思い出させてくれるような、そんな不思議な子供達だ。

午後になると、去年の教え子達が毎日のように顔をだしてくれた。今年はリーダーが少ない。みな、家の手伝いが忙しいようだ。また、近くのお寺での授業が詰まっているため授業に来られないと言っていた。そんな中、時間をさいて顔を出してくれる子供達の姿を見ていると胸が熱くなった。

数人の生徒と共に、子供達が通う小学校にいった。度重なるスコールの影響で床と机はビショビショになっていた。汚れた教室、水浸しの床、友好学園とはまた違う雰囲気を目の当たりにした時、胸が痛くなった。しかし、勉強する子供達、そして先生のきらきらした瞳を見ている



と、勉強とは環境ではなくモチベーションなのだと気付かされた。

そんなやりとりをしている中、一人の生徒と話す機会があった。彼は将来、日本語の通訳になりたいと言った。しかし、日本語の先生がいないと寂しげな表情を見せた。勉強がしたいのに、自分の力だけではどうしようもない環境がこの国の子供達には多すぎる。私達がなんとなくやり過ごしてきた日常の大切さを彼らの必死な姿から学んだ。しかし、その現実にも向き合い、努力する姿は本当にたくましくあり、けなげで愛おしいものだった。もし、日本人である私にほんの一時の時間であったとしても、それがたとえ、ただ話すことしかなかったとしても、少しでもなにか出来るのならば、今だけでも精一杯してあげよう、そう思った。

授業も後半に差し掛かろうとしたある日、ずっと顔をささなかった生徒が来てくれた。去年笛をあげた子だ。今でも大切に持っていてくれた。去年よりもま



た一段と上手になっていた。すると、数人の去年の生徒達が「日本語を勉強したい」と言いに来てくれた。そしてその次の日から、下級生に交じって授業を聞きに来てくれた。彼らからしてみれば、本当に基礎的でつまらない授業だったかもしれない。しかし、必死に黒板の文字をノートに書く姿を見て暖かな気持ちになった。この子達のその真っ直ぐな姿は一年経った今も何の変りもなかった。

最後の授業の日、教室には彼らの姿はなかった。忙しいから仕方ないよな……と寂しい気持ちになっていた時だった、授業の後半に何人かの生徒を連れて顔を出してくれた。その姿を見た瞬間涙が止まらなかった。最後までこの子達は、人に優しさを与え続けてくれる。そんな彼らに対して私はありがとうと言うことしか出来なかった。そんな私を見ながら彼らは少し恥ずかしそうに「うん、うん。」と頷いていた。

カンボジアは私にとって大切な居場所だ。大好きな人がいる。会いたい人がいる、待っていてくれる人がいるということは本当にかげがえのない、幸せなことだ。「来年はもうこれられない。」子供達はわかっているようであった。そして最後に、「カンボジアでずっと待っています。」そう言ってくれた。偽善とか、そういうのではなく、心の底から子供達には幸せになってほしい。これから辛いこと、悲しいことがたくさんあると思う。そんな時、一人でも多く一緒に立ち向かってくれる人が傍にいてくれますように、常に笑っていられますように、チャンスがたくさんありますように、キラキラした世界が見られますように、夢を持ち続けますように、これは私だけではなく、彼らと過ごした人達は皆そう願うと思う。そしてこの気持ちを後輩たちには託したい。カンボジアと日本の間に暖かな関係が続きますように、あの子たちを頼んだよ。私達がいなくなった後も、あの子たちを見てあげてね、今はその気持ちで溢れている。去年は最前列でお別れ会の会場にいたリピーターの子供達は、今年が一番後ろでひっそりと参加していた。彼らの居場所はもう違う所へ進んでいる

のだ。少し寂しいが、それも立派な成長の証である。

いつの日か、この子たちが通訳として活躍してくれる日が来るかもしれない。彼らが成長した姿にまたいつか会いにきたい。待っていてくれる人がいる。だから、さようならではなく、「またね。」その言葉を胸にこれからも頑張っていこう、そう思うのだ。



## 最後の友好学園

文化交流学科 4年 越 沙央里

「来年もまた必ず来よう」そう思ってから、あっという間の1年間。今年も再びこの地に来ることができた。のどかに流れる時間、目を開けられないほどの強い日差し、子供たちの笑い声。1年ぶりの友好学園は去年と同じように元気に私たちを迎えてくれた。

変わったところと言えば、新たに水浴び所ができ、1つの井戸にモーターが設置されたこと。このお陰で今年の生活は去年に比べると大分楽になった。

更に驚いたことは、村の市場に大きなマーケットができ、サトウキビジュースの機械が自動になっていたこと。(笑)何も変わっていないように見えて、少しずつではあるがここも発展していることに気付かされた。

子供たちも更にパワーアップして私たちに元気いっぱい笑顔を見せてくれた。

授業はと言うと、何もかも初めてだった去年に比べると大分スムーズに進行することができたと思う。

また、今年は授業以外にも子供たちとたくさん交流することができ、今まで知らなかった子供たちの生活を知ることができた。ある生徒は2時間もかけて学校に通っていること、またある子はこの学校に通うため家族と離れ、妹と二人で暮らしているということ。その子はたまに、朝少し遅刻してくることがあったが、その話を聞いて納得した。朝から家事をやっているためだった。そこまでも

この学校で学びたいという意欲にただただ感心した。

去年のこの生活は、何をすることも何を見るにも全てが新鮮で毎日必死だったが、今年は生活にも余裕が出てきたため、また違った角度から物事を見つめ、感じることができたと思う。

来年はもう来られないのか…そう思うとお別れの時は悲しくてしょうがなかった。来るのは今年で最後と生徒達に伝えていたためか、去年の生徒もお別れに来てくれた。

何も言わずに寂しそうに見つめる子、抱きしめてくる子、また、一番なついていた子が木の影で隠れて泣いているのを見た時は、本当にこれが最後だなんて信じたくなかった。

帰りのバスの中、子供たちのことをずっと考えていた。確かにこのプログラムで参加することは最後だが、まだ他にも子供たちをサポートする方法はたくさんあると思った。

日本でも出来ることはある。

早ければ5年後、私が教えた子供たちの中から大学生になる子がいる。そうなった時、もう一度みんなに会って一緒にごはんを食べよう。そして日本語で話せたらと思う。

# 村の人々に会いたから

文化交流学科 4年 梶山 真矢



好奇心には勝てません。タマゴとトリの中間＝  
話題のボンティアコーンはフツーにおいしい！

3度目のカンボジア日本友好学園でのボランティアも、実に私を楽しませてくれ、笑わせてくれ、考えさせてくれ、成長させてくれた。太陽の匂いってこのことか、と言わんばかりの気持ちいい日差しときれいな空。それが私に、「一年間お疲れ様、そしてお帰り」といっているように感じられる。

私たちがボランティアを行っている学校は、カンボジアの南方に位置するプレイベン州リング村というところにある。2週間の期間を過ごすのには、もちろん小学校だけでは生活出来ない。私たちは新鮮な東南アジア特有のフルーツや食料、ミネラルウォーター、氷、文房具など、必要最低限のものは揃っている、学校から歩いて15分くらいの市場を毎年利用している。それは同時に、学校に来ている生徒たちの行動範囲でもあり、市場に行くたびに、必ず誰かに会ったりするのだ。

ちなみに私は市場に行くことが楽しみであった。と言っても、市場に行くのもただ15分歩けばいいという訳ではない。授業や夕食などの時間の関係上、私たちが自由に市場に行ける時間帯は毎日決まってお昼の12時から4時くらいの間、つまり暑いのだ。そのため、飛び切りの用が無い限り、ほとんどのメンバーは市場に出向こうとはしない。出来れば私も体力が惜しいので行きたくは無い。しか

し、それでも市場に行きたいと思うのは、村の人々に会いたから、という気持ちからである。

去年は、初めて来た時に一緒に記念撮影をした喫茶店のおじさんに会いに行ったが、2年の間に亡くなっていた。時間の流れと、いつでも会えるという保証など絶対にないのだということを思い知らされた。今年は、音信不通になってしまっていた、ずっと会いたかった通訳さんに会うことが出来た。彼は大学受験に数回失敗し、結婚して奥さんと共に小さなお店を経営していた。日本語が通じなかった記憶が強かった彼だが、驚くことに、店のカウンターに日本語の教科書と、日本語がたくさん書いてあるノートが置いてあった。「今も勉強しています。」と笑う彼に私はとても嬉しい気持ちになった。そして再会だけでなく、新たなお気に入りスポットとおじさんも見つけてしまった。行く前は億劫でも、行ってしまおうと楽しくなってしまう。私が思う、この村の魅力である。

実は今年、その市場が少し大きく、さらにきれいになっていた。つまり「発展」していたのだ。しかし、発展の裏には貧富の差というものがつき物なのだろうか、今までよりも明らかに治安が悪くなったように感じた。お金を恵んでくださいといってくる老人たち、日本人を脅かして笑う若者たち。そんなことはカンボジアではよくあることではあるが、この村にも少しでもそういった人たちが出てきてしまったことがショックであった。でも間違いなく、数年で村は整備され、ますます発展し、住みやすくなっていくだろう。

そして今年は英語が流暢になり、コミュニケーションに全くといっていいほど問題が無くなった、一番初めに仲良くなった生徒たちと毎日のように遊んだ。出会った当初は中学一年生だった彼らが今年には高校一年生になり、声変わりも



し、いつの間にか私よりも大きくなって  
いる。

勤勉な彼らは毎日いくつもの塾に通っ  
ていたが、その合間を縫っては私のとこ  
ろに誘いに来てくれた。彼らの塾は、学  
校から市場とは逆方向に15分ほどの場  
所にもあった。そこはお寺で、いわゆる  
昔の日本の寺子屋という感じのところだ。  
彼らの勉強している姿も久々に見る  
ことができたし、昔のように体を張った  
鬼ごっこなど、懐かしい遊びをした。市  
場に行ったときには、親や親戚に私を紹  
介してくれて、私も彼らのもっと深いと  
ころを見られたような気分で嬉しくなっ  
た。

さらに、午前中の私たちの授業には、  
彼らの弟や妹が参加していた。一人の生  
徒の家にも招待され、フルーツをご馳走  
になったり、家の中を見せてくれたりし  
た。それは私にも初めての貴重で楽しい  
経験となった。しかし、今年は本当に雨  
が多く、私はいつもそれに怯えていた。  
学校から30分ほど離れているその生徒  
の家には、日本から一緒に参加してい  
る後輩の女の子も一緒だったので、長居  
せずに、雨が降る前には学校に戻ろうと  
決めていたが、つい時間を忘れ、気付く  
と辺りにはたくさんの雲が立ち込めてい  
た。

「夕食までの時間には帰らないと」と  
いう思いから、私は先頭に立って学校ま  
で走った。しかし案の定、あと一歩で学  
校のところで雨が降ってきた。知っての  
通りスクールである。とてつもない雨で、  
そのまま駆け抜けて学校に戻りたかった

が、何屋さんかわからないところで雨  
宿りをした。しかし、カンボジアの人た  
ちは、それが日常なのだ。雨がほとん  
どの確率で毎日降るのに、ここには傘とい  
うものがない。というかあるのかも知れ  
ないが、使用しているところは見ただ  
きがない。どうせすぐ止むので、どこかで  
雨宿りをする、というのがカンボジアの  
セオリーなのである。雨宿りをしていて、  
そこのお店の旦那さんも「これはすご  
いや」といわんばかりの顔で笑っている  
し、生徒たちも、「まあゆっくり座りな  
よ」という具合にイスなどを差し出して  
くれるのだ。自分の余裕のなさに少し笑  
い、少し恥ずかしくなった。これがカル  
チャーショックというものなのだろう。

カンボジアに来て、嫌いだった雨が好  
きになったという先輩がいた。今年は雨  
がすごく多かったので、生活上では確か  
に不便な時もあった。しかし、去年は雨  
が全く降らず、米が育たないと深刻に嘆  
いていた村の人たちを思うと、今でも農  
業が国の主な収入源であるカンボジアで  
の雨は、やはり嬉しくも感じられた。考  
え方を少し変えるだけで、嫌なことがど  
うでもよくなったりする。カンボジアは、  
そういったチャンスときっかけをいつも  
私にくれた。

「お前一回カンボジア行った方がいい  
よ」という先輩の一言から始まった私と  
カンボジアの4年間。初めてカンボジア  
でボランティアをした年に仲良くなった  
彼らに会いたいという一心で、もう一度  
カンボジアに行った。今度は行ける余裕  
があるなら、後悔するから行こう、とい

う気持ちでまたカンボジアに行った。

他の国にも行った経験はあるが、カン  
ボジアに勝る国は未だにないと思ってい  
る。それは私の中でのということであるが、  
2週間という期間を3回繰り返したこと  
で、1回や2回では分からなかつただろ  
うことが、たくさん学べた。日本人以外  
の人と家族のように親しくなれた。

就職も決まり、もう来年はこれない  
ことを悲しい気持ちで告げると、みんな  
寂しがってくれたが、「でもまやは絶対  
にまたここに来ると思う。」と生徒に笑  
われてしまった。私のことはお見通しな  
んだね!! すぐではなくても、きっと私  
はまたこの村を訪れてしまうだろう。彼  
らやカンボジアとの絆は、むしろこれか  
らの方が楽しみだ。



# いっぱい笑うと楽しい授業に

文化交流学科 4年 橋本 麻美



「内定が貰えたら来年も来ようね」生徒との別れの涙も乾く頃、2週間の苦楽を共にした友人と笑いながら交わした去年の約束。そして今年、約束は破られることなく無事果たされた。——私の内定は無いままに。「(これでいいのか自分)」そう問いかけてくなくなることもしばしばあったが、こうなるであろうことは正直、去年約束を交わしたあの時点でなんとなく予想がついていた。将来の不安を煽るように背負った愛用のバックパックがずしりと肩に重くのしかかったが、それでもその不安も日本友好学園の正門で出迎えをしてくれた何十という生徒たちの笑顔を見たらたちまち吹き飛んでしまった。

2度目の友好学園。そして最後の友好学園。また来られる事はあるかもしれないが、この生徒たちと授業が出来るのは今年が最後だ。その思いがあった分、今年の授業には大分力を注いだように思う。

私たちのグループは「日本文化を知っ

てもらおう」をテーマに掲げ、紙芝居やけん玉、折り紙などを取り入れたり、日本の広告を見せたりと、生徒の興味を惹く授業展開を心掛けた。私自身2度目であること、そして同じグループの友人が今回3度目であること、さらには授業で通訳を担当してくれたカンボジア人の男性が通訳グループのリーダーで、とても日本語が上手だということもあり、授業に関する不安は特に無かった。

今年の生徒達は去年に比べ、今回の特別授業で初めて日本語に触れることが多いという子が多く、その点に関しては多少の懸念もあったが、授業の内容を少し簡単にすることで大丈夫だろうという結論に至った。実際の授業でも予想通り個人でのバラつきは多少あるものの、クラスごとに対応や時間配分を変えることでうまくカバーする事が出来た。

「私たちのグループすごいね」授業後には友人とハイタッチを交わしながらそんな軽口を叩く余裕さえあった。

しかしプログラムも折り返しを過ぎた

頃、その驕りが仇となり表れた事があった。いよいよ授業が中級になり、板書のスピード、発音の巧拙など、やはり生徒個人のバラつきが目に見えてわかるようになってきた時だ。出来ない子に合わせたのでは授業は進まず、出来る子に合わせれば、出来ない子が取り残されてしまう。予定通りに進まない授業、何度教えてもなかなか上達しない生徒。「去年の子達ならできたのに」そんな思いもあってか焦りと苛立ちが募り、険しい表情になってしまった事も多かった。

そんな私たちを見かねたのか、通訳の彼が少し言いづらそうに口を開いたのは、授業が終了し、最後の生徒がネームカードを押し付けるように私に渡してさようなら！と足早に立ち去った後の事だった。「…授業が怖いと子供たちは楽しくないです。」私と友人は思わずネームカードを集める手を止めた。「厳しいのは、怖いです。日本語を嫌いになってしまいます。冗談を言ったり、おもしろいことをすると子供たちは笑います。いっぱい笑うと楽しい授業になります。」

その日は特に生徒たちの反応が鈍かったせいか進みが遅く、私と友人もどうしたものかと意気消沈していたのだ。彼の言葉に私は思わず唇を噛み締めた。授業の不出来を生徒のせいにした自分の思い上がり気付かされ恥ずかしくなったのだ。確かに授業を手伝ってくれる彼の言葉や行動に、いつも生徒たちは大きな口を開けて笑っていた。現地の言葉なのでなんと言っているのかはわからないけれ





ど、それでもひとしきり笑った後は生徒も緊張が解れるのか、いつもより積極的に手を挙げてくれる子が多かった。

彼の言葉に心を動かされた私と友人は、次の授業から「いかに授業を理解してもらうか」ではなく「いかに授業を楽しんでもらうか」ということに重点を置くことにした。何よりもまず自分たちが笑顔で。時にオーバーリアクションで、時に稚拙なクメール語を交えながら。生徒たちが授業を楽しんでくれるよう、まずは自分たちが授業を楽しんだ。授業は笑い声に溢れ、授業が終われば生徒たちは眩しい笑顔と大きすぎる元気な声でさようなら！と嵐の如く帰っていった。

一気に静かになる教室。残ったのは、やり切ったという達成感と胸いっぱい満足感だった。「…いえーっ！！」思わずグループの皆でハイタッチを交わす。こういう時に私はいつも痛感する。私たちが教えているだなんてとんでもない。いつだって教えられているのは私たちなのだ。初心忘れるべからず、なんて平凡な言葉が頭に浮かび、小さく笑みを漏らした。

毎年、この2週間は驚くほど早く過ぎる。しかしその中に、一生忘れない思い出が、それこそあの学校で見上げた夜空の星屑の数ほど出来た。同じぐらいの思い出を、子供たちにも作ってあげられていれば良い、といつも思う。私たちと学んだ事が少しでもきっかけになり、この先も日本語を勉強してくれたらそれは何よりも嬉しい。そしてあの中の子供のうち何人かでも構わない、このプログラムの通訳として教壇に立ち、未来のキリ大生の手助けをしてくれる日を、私は願って止まない。



## 会いたいなら必ずまた会える

文化交流学科 4年 和田 未萌

友好学園までの道のり。一年前と同じ風景。やっと帰って来ることが出来たと思った。考えてみれば、この一年間「カンボジア行きたい」と何度口にしたか分からない。心待ちにしていた、学生生活最後の夏が始まった。

### <学園での生活>

朝、5時。隣の蚊帳から聞こえてくる目覚ましで起床。外は、まだ薄暗く、肌寒い。眠い目をこすりながら井戸水を汲み洗顔をする。この時ばかりは、洗面台が欲しいと思う。その後は、女子は一列になり、廊下で化粧。ライトで照らし、その光だけを頼りにする化粧は、なかなか難しいものがある。6時に朝食。その間、続々と生徒が集まる。みんな何時に起きて、来ているのだろう。一時間以上かけて来ている子もいるらしい。そう思うと、本当に頑張ろうと、気合が入る。

7時から授業開始。1人1人の名前を呼び、初日に苦労して作った名札をかける。子供達の目が、キラキラしていても眩しい。どのクラスからも、子供たちの元気な声が聞こえてくる。4時間の授業だが、生徒たちの熱気と、なれない授業にくたくたになる。

授業が、終わると昼食の準備。プノンペンで購入した、インスタントラーメンや、学校の隣にあるパン屋さんでパンを購入し、みんなで食べる。友好学園の卒業生が作るパンは、芋パンやバナナパンなど種類も豊富だ。去年より、おいしくなっていて驚いた。

昼食の後は、自由時間。洗濯をしたり、昼寝をしたり、市場まで買出しに行ったり、学校に遊びに来た子供たちと遊んだり。17時の夕食まで、時計を外し、ゆっ



くりと時を過ごす。子供たちの笑い声。澄み切った青空。風になびく洗濯物。そんな景色を見ていると、悩み事がいつの間にか消えていく。本当に、心癒される時間だ。子供たちが、帰り始めるのが、夕暮れのサイン。時計なんて無くても、子供たちには分かるのだ。

夕食を食べた後は、授業のミーティングをする。授業の反省点や、クラスの特徴などを踏まえ、明日の授業に備える。その後は、お風呂。お風呂といってももちろん、シャワー、湯船、お湯など無い。昼間、溜めた井戸水をかぶる。今年は、夜冷え込むことが多く、寒さとの戦いだった。しかし、幸い体調を崩す人もなく、本当に良かった。

唯一残念だったことは、夜雨が多かったことである。去年見た、カンボジアの星空がずっと焼きついて離れなかった。今年も楽しみにしていたのだが、最初の二日間しか見ることが出来なかった。しかし、その二日間の星空は、去年同様に、本当に綺麗だった。こうして、カンボジアの夜が更けていく。私は、真っ暗闇の中、賑やかな笑い声を聞きながら、眠るのが大好きだった。学生最後の夏をみんなで過ごせて、本当に良かったと思う。

### <小さな世界>

私たちのグループの、今年の授業のテーマは、歌だった。カンボジアには、音楽の授業が無い。去年も、kiroroの「未来へ」を教えたのだが、手拍子を合わせることから始め、大変苦労した。そのため、今年は子供たちが覚えやすいように、「小さな世界」を選んだ。私たちが発信したメッセージは、子供たちに届いたのだろうか。一人のカンボジア学生がお別れの際言った、「世界は狭いから、会いたいと思ったら、必ずまた会えます。」という言葉がとても心に残っている。私は、この言葉を胸に、もう一度みんなに会える日を楽しみに、日本で頑張っていきたい。



# We Laughed and Learned a Lot

## Harris Ives

Among the things that I have come to enjoy during the volunteer work in Cambodia, is teaching in my bare feet. In addition to being unshod, I wear baggy pants and a loose-fitting, over-sized T-shirt. The students in the IC teaching teams are similarly attired. The intense heat of August in Prey Veng dictates our fashion.

As the IC student-teachers and I make our way through the maze of students sitting at desks, our bare feet sometimes brush up against the bare feet of students. We don't apologize for the accidental contact made with our feet. In fact, we smile at the democracy of it all – students and teachers focused more on English lessons than we are on our appearance.

We get up at 5:00 every morning, have our common breakfast meal at 6:00 and begin our teaching day at 7:00, we have little inclination to present ourselves in sartorial

splendor.

In days gone by, I insisted on an “atmospheric approach” to teaching: the best teaching, I thought, had to be done in suits. The electric lighting in the classroom had to be just so. The air conditioners and heaters had to be adjusted to a perfect temperature.

There is no electricity in the classrooms at The Cambodia-Japan Friendship Junior and Senior High school. I have learned that quality instruction and interaction with students can occur in less than ideal circumstances (I confess that I even neglected to shave a day or two – and I suspect the children didn't even notice!)

This August, we had days of torrential rain (Cambodian students came to school earlier than usual to sweep out the water from the classroom). The sun was so bright on some days, creating a glare on the blackboard. One little boy



communicated to me, “Harris, you have to angle the wooden shutters in a certain way – if you do it right, we can see the blackboard.”

On another day, a huge bug lounded on the floor, frightening Nanako and Yukari – yeah, and frightening me as well. The lesson was only interrupted briefly. After the Cambodian college student-translator disposed of the bug, we proceeded with the lesson, practicing our little drama *The Bad Guest*. Reeling from laughter at two bug-frightened Japanese girls and one American man, the students settled into laughing at the day's skit:

*The Bad Guest*  
 Host: Welcome to my house.  
 Guest: I'm hungry, I want to eat dinner!  
 Host: Well, here is some bread.  
 Guest: I don't want bread; I want rice!  
 Host: O.k. Here is rice.  
 Guest: (tasting the rice), This rice is not good!  
 Host: You are not polite. Go home!

It was a lighthearted summer: we laughed at the intrusions of bugs and the sun's glare. We laughed at ourselves. We laughed at fun skits. But we all learned many things.



## アジアンボランティア 09 会計報告

担当・木村紫絵里、齋藤美穂、梶山真矢

収入の部		単位はすべて US\$
IC 学生企画奨励金		1000
学生拠出金	\$185 × 18	3330
収入計		4330

支出の部			
友好学園施設使用料 (寄付)		1400	
Aziza School 寄付		200	
Hight House Orphanage 寄付		200	
食品	チーズ \$2 × 25	50	175.45
	ラーメン 60 食	10	
	ジャム × 4	11.3	
	牛乳	21.15	
	MILO	2.75	
	パン	18.75	
	水	26.125	
	果物	25.15	
	ジュース、ドライフルーツ等	10.225	
昼食	プサトリアより出前 1 回		30
朝夜食 + 礼	\$3 × 20 人 × 12 日 + \$100		820
食事会	8/22 Khmer Kitchen (40 人?)	304	474
	9/5 ダラレスマイ (30 人?)	170	
交通費	8/23、9/2 PNH ⇄ 学園 × 4	280	344
	8/29、30 モトロモ × 2	16	
	9/6 Tuktuk \$16 × 3 台 終日	48	
施設入場料	9/6 Killing Field		24
宿泊費	8/30 ネットルーン \$12 × 11 室		132
大学生謝礼	10 名		275
その他	ガス	15	44.3
	バッテリー	2	
	ガソリン	3	
	蚊帳	4	
	コピー	0.4	
	たわし	1.05	
	ほうき	1.5	
	洗剤	0.6	
	トイレトーパー	0.75	
ギター	16		
国内での準備の買出し	味噌汁、画用紙、文房具など		216
支出計			4334.75

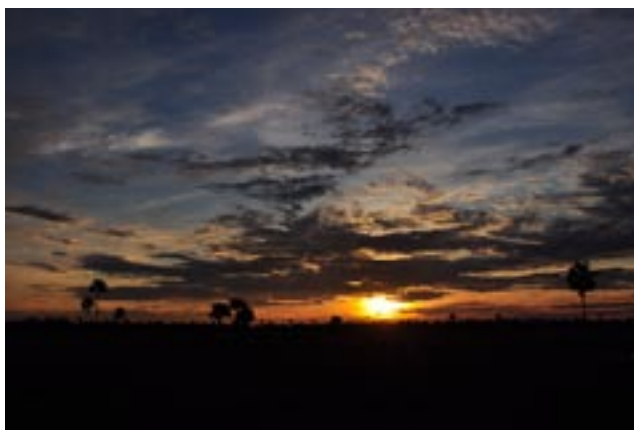
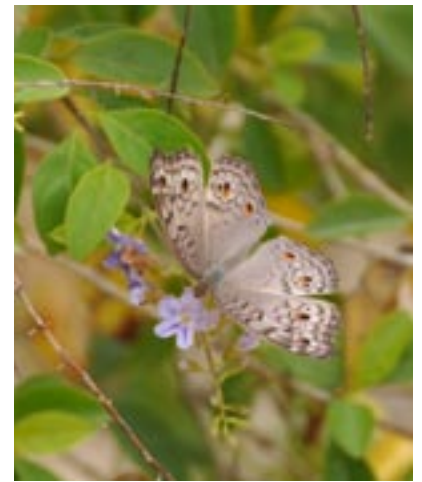
収支計算	収入 - 支出	-4.75
------	---------	-------

残金		11.8
----	--	------

◆会計記録に基づき収支を計算すると実際の残高と \$16.55 の誤差が生じているが、記録メモに記載する際のミスかと思われる。小額であり、これ以上の追求は不可能でもあるので、以上をもって会計報告とする。

◆プログラム本体の個人負担は、一人当たり 185 ドルとなるが、このほかプノンベンのホテル代 (1 泊 12 ドル程度) は部屋によって料金が少々異なったため個人払いとした。さらに、日本からの渡航費 (4 万～7 万円程度)、ビザ代、ホテル代、観光費用を各自が支出している。

◆アジアンバザール終了後、各参加学生にボランティア・サポート基金より補助金を支給する予定。



## アジアボランティア・サポート基金

05年にタイ南部の津波被災地の復興支援に赴きたいという卒業生を支えようと活動を始めてから、6ヶ月のサイクルを8期終了、現在9期目の途中です。(この卒業生は今年の10月まで青年海外協力隊員としてキルギスに滞在、先日帰国しました。)

第3期以降は、夏のカンボジア日本友好学園での教育ボランティア活動に参加する学生および、大甕町商店会の主催する「交流祭」に「出張アジアバザール」として出店する学生の交通費補助として使われてきました。

また、学園祭アジアバザールのための買出し資金を貸与し、バザール終了後に回収するというかたちで、アジアバザールをサポートしてきました。

アジア地域でのボランティア活動に取り組みたいという人をサポートするための基金です。「こういう活動に資金援助をしてほしい」という提案を随時受けつけています。

サポート基金の会計は次のようになっています。要点だけですが、会計報告とさせていただきます。

第8期終了時点(09年7月末)での残金 201,785円  
 第9期に(現在までに)寄せられた寄付金 105,001円  
 現在の基金の残高は 306,786円  
 で、うち、AsianBazaarに 70,000円を貸し出しています。

アジアバザール終了後、買出し資金がサポート基金に返却されますので、夏のカンボジア・プログラムに参加した学生にボランティア補助金を支給する予定です。

12月にはサポート基金の第10期に取り組みます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

### 参加メンバー

文化交流学科 2年・市毛孝史、大森直浩 4年橋本麻美、梶山真矢、越沙央里、金子竜也、大竹貴子、和田未萌

現代英語学科 1年・木村紫絵里 3年・秋山菜々子、小野智恵美、田山由佳里、時崎彩香

人間福祉学科 1年・齋藤美穂 食物健康科学科 1年・西野治樹 大学院聴講生 隈強一

教員 Harris Ives、藤田悟

### アジアボランティア・レポート 09

#### 目次

- 2 / 木村紫絵里 / たくさんの「初めて」に遭遇
- 2 / 齋藤美穂 / 毛の生えた大きなクモが
- 3 / 西野治樹 / ボランティアというよりは
- 4 / 田山由佳里 / あっ、これがカンボジアかぁ!!
- 4 / 時崎彩香 / 忘れられない夏
- 6 / 小野智恵美 / 次にいくならこれを持っていこう
- 7 / 秋山菜々子 / カンボジアの『当たり前』に苦戦
- 8 / 隈強一 / 生命の輝きを尋ねて—カンボジアの旅—
- 10 / 金子竜也 / コミュニケーションが取れる喜び
- 11 / 大森直浩 / どこでもスポーツを楽しむ気持ちは
- 10 / 大竹貴子 / いつの日か、またね
- 11 / 越沙央里 / 最後の友好学園
- 14 / 梶山真矢 / 村の人たちに会いたいから
- 16 / 橋本麻美 / たくさん笑うと楽しい授業に
- 17 / 和田未萌 / 会いたいなら必ずまた会える
- 18 / Harris Ives : We Laughed and Learned a Lot
- 19 / カンボジアボランティア 09 会計報告

### カンボジアボランティア 09 スケジュール概要

- 8月22日(土) プノンペン、アンコールブライツホテル集合  
カンボジアの大学生と会食
- 8月23日(日) プノンペンから友好学園に移動
- 8月24日(月)～28日(金) ボランティア授業
- 8月29日(土)、30日(日) ネットルーンで一休み
- 8月31日(月)～9月4日(金) ボランティア授業
- 9月5日(土) プノンペンに移動 カンボジアの大学生と会食
- 9月6日 Killing Field、Aziza School、Light House Orphanage  
訪問 プノンペンにて解散 各自帰路に

